

第 17 回 大賞(金の星賞)受賞作品

# 「知恵の神さま」

北海道標茶高等学校三年 高橋 璃来



賢 治 の ま ち か ら  
**全国高校生★童話大賞**



大賞 〈金の星賞〉

『知恵の神々』

北海道標茶<sup>しへちや</sup>高等学校二年 高橋 璃<sup>り</sup> 来<sup>らい</sup>

中三の夏休みにはどこかに遊びに行きたいと母に愚痴<sup>ぐち</sup>ったことがある。

受験生の私にびったりの勉強できるところがある。と言われた時には断<sup>す</sup>隙<sup>すき</sup>なんてなく一週間<sup>いなか</sup>田舎<sup>いなか</sup>のおばあちゃん家にお泊りが決定していた。

ゆらゆらと何時間も列車にゆられやっと目的の駅に着く。おかげでお尻が痛い。

降りると、予想した熱気はなく少しひんやりしており、ぽつんぽつん降りした駅が迎えてくれた。

「レナちゃんお久しぶり。何時間も疲れたでしょ、ほらほら早く車に乗りなさい」

優しい笑顔のおばあちゃんが駅の中からひょっこり顔を出し、手招きをしていた。

わざわざ車で出迎えてくれるなんて優しいなと思っていたが、おばあちゃんの家は随分<sup>ずいぶん</sup>と山奥で、これから私は修行でもするのかと思っほじ奥まで来た。

することもなくもう見飽きた外を見るしかない。草原が広がり所々に牛が放し飼いされているのをぼんやり見つめる。

「おやまあ」  
のんびりとした声とともにブレーキがかかり私は勢いで前の席に鼻をぶつける。

「レナちゃん大丈夫？ タンチョウが飛び出してきたから急ブレーキをかけたかったわ」

痛む鼻を押さえ、そのタンチョウと言うものを見るため外を睨<sup>にら</sup>み付けながら覗<sup>のぞ</sup>いてみる。



が、そこにはモデルみたいに細くて、きれいな白い鳥が真っ赤な頭を揺らしながら優雅に歩いていたのだ。

ツルと言われればわかったが、こんなにも凶鑑で見たものと実際に見たものが違うだなんて思わなかった。

こんな田舎に楽しみなんてないと思っていたがきれいな物を見ると嬉しくなる。

道なりに進んでいた車が速度を落とし、脇道に入る。そこはコンクリートではなく砂利道で、車と一緒に体もがたがたと揺れる。

おばあちゃんの家も牛を飼っているためかどんだん山奥に入っていく。

「あらまあ」

またもやおばあちゃんの、のんびりした声とともに車が止まる。

今回のブレーキには耐えた。ここで乗り物が止まるのは動物が出てくるからだと思いい前の席へと身を乗り出す。もしかしたらまた、タンチョウかもしれない。

すると、茶色い地味な色の鳥が飛び立つのが見えた。羽こそ大きいものの、タンチョウのようなスタイルのよさはない。色もぱっとしないし、期待した分がっかりしてしまう。

「あら、シマフクロウじゃないかしら。絶滅危惧種で珍しいのよ。家の近くで見られるなんて思わなかったわ。レナちゃんにはびつたりの鳥よ。良かったわねえ」

おばあちゃんはタンチョウのときより嬉しそうにしていたが、私からしてみればただの地味な鳥にしか思えなかった。

さらにはびつたりと言われる始末だ。私が地味ということだろうか。勝手に期待しといてシマフクロウには悪いが見られた嬉しさはない。

ふと、林の中の何かが目に入る。その一帯だけ草が生い茂っており、薄暗い林の中にぼこぼことした何かが集まっていたのだ。

薄気味悪くてすぐに視線を母達の方へもどす。家につくまで何となく外を見ることができなかった。

晩御飯は大好きなカレーだったが、こんな何も無い所では一週間勉強漬けだろうと思うと気持ちが沈んでしまう。カレーをちびちびと食べていると、



「女子中学生のレナにはこんな田舎暇だべさ。そんなレナにいいこと教えてやっが?」

なまりのきいた大きな声で台所からカレーを持ったおじいちゃんが出てくる。

レナの横にあぐらをかき、気になるだろう気になるだろうと、期待に満ちた視線を送ってきたので、渋々何なのか聞いてみた。

「んんー? やっぱ知りたいべか。仕方ないから特別に教えてやるべよ。実はなこの家の近くにはな、知恵の神様がいてな、神様が持つてる宝物に頭を良くする力があるんだべよ」

笑顔でいるから何かと思えば、迷信のような話をしてきた。

「おじいちゃん、私確かに中三で受験生だけどそんな話信じないよ」

あきれ顔でおじいちゃんを見たが、本気にするとは最初から思っていないかったのだろう。からかうような笑顔を向けながらカレーを頬張っていた。

「まあ、おじいさんったらまたそんなこと言って。でもね、レナちゃんあまり深い森に行っては駄目よ。」

特にヤチボウズがいるところはね」

「ヤチボウズ?」

「家に来る途中にもあるのよ。本当は草が積み重なったものなのだけどね、沢山あって地面がぼこぼこに見えるのよ。」

ああ、あの薄気味悪いやつだ、とすぐわかった。どうやら、ヤチボウズと言っらしい。

「ヤチボウズ自体は可愛いだけどね。とにかく恐い神さまだっているんだから。会っても絶対目を合わせちゃ駄目よ。連れて行かれちゃうわ」

あまりにもおばあちゃんが真剣に言うってくるものだからおじいちゃんの話も冗談に聞こえなくなってしまった。

だが、わざわざ探しに行く気なんてなかったので私には関係のない話だと思っその話はそこで終わった。

その後の六日間は平和にのんびりと田舎の生活を送った。勉強もそこそこ遅いインターネットで暇をつぶす。しかし、寝返りをうっただけで圏外になっってしまうおかげで、左半身が痛い。





でも、そんな中で一つ楽しみができたのだ。袋片手に今日も家の裏にスキップで行ってみる。

すると、遠くにいた二羽の大きな白い鳥が赤い頭をひょこひょこ揺らしながら寄ってくる。

最初に来たときに、タンチョウにひとめぼれしたとおばあちゃんに言ったところ笑顔で家の裏に連れて行かれたときはどうなるかと思ったが、趣味で餌<sup>えさ</sup>をあげているとは驚いた。

今ではおばあちゃんの代わりに餌をあげることにしている。

「ほらほら、ごはんだよ」

餌のとうもろこしを地面にまく。野生なので触ったりはできないが、こんなに近くで見られるだけですごいと思う。

私も近くに腰を下ろし、もう一つの袋からまるまる一本とうもろこしを出す。あまりにもタンチョウが美味しそうに食べていたのでお母さんに茹<sup>ゆ</sup>でもらったのだ。

最初の頃、タンチョウにあげているものをこっそり食べたが人間用ではないらしく、乾燥していてしかも味がなかった。すぐに吐き出し草むらに証拠を隠したのは秘密だ。

今朝茹でたばかりのとうもろこしは手の上で跳ねさせていないと持てないくらい熱くて今食べるのはいったんあきらめることにした。

ふと、タンチョウの方を見ると食べ終わったのかこちらを見つめている。

「そんな目で見てもだめだよ。これ以上あげたら私が怒られちゃうんだから。」  
おかしいな、と頭をかしげる。いつもなら食べたらすぐどこかに行ってしまう子供たちなのに。

すると、タンチョウたちが歩き出す。今日も見送ろうと思ったのに少し歩くとこちらを振り返り止まってしまった。

まるでついてこいと言っているように見えてしまう。

そんなこと現実にはありえないことだと頭ではわかっているけれど確かめるように一歩また一歩と踏み出す。

するとタンチョウたちはまた歩きだした。そしてまたこちらをうかがうように止まったのだ。



予感が確信に変わり、恐る恐るついていくことにしたが、だんだん頭がぼんやりしてきた。

ひたすら置いて行かれないことだけ考えタンチョウたちを追いかけたが。

「あっ……」

ついもれた自分の情けない声と大きな羽音によってはっと我に返る。

二羽のタンチョウが飛び立ち、空へと消えて行くのが見える。慌てて追いかけるが空を飛ぶ鳥に追いつける訳がなく疲れて立ち止まってしまつ。

そこでふと、足が思うように動かないことに気がついた。

地面は雨が降った直後のようにぬかるんでいた。長靴を履いていたので助かったが、いつもの靴なら今頃中まで水浸した。

そこで初めて辺りをゆっくりと見渡す。草は生い茂り、地面は妙に水っぽい。そして辺り一面には霧がかかっている。

ぼんやりした頭で歩いたから帰り道なんて覚えてないし、スマホなんて持ってくる余裕なんてなかった。

電波だつてきつとないだろう、私の左半身が証拠だ。

「あのタンチョウたちめ、ちょっと綺麗だからって調子乗って今度あったら鳥鍋にしてやるんだから」

ここに来ていきなりサイバイバル生活になりそうで、あんなに可愛がっていたタンチョウたちにさえ怒りが湧く。

怒りのおかげで今のところ不安はないが早く帰りたい。

辺りに何かないかと見まわしていると草むらがきらりと光った。特に何も考えず近づいてみる。

手を伸ばし一歩足を踏み込んだ、瞬間、

「そっちは駄目だ！」

突然、大きな声と強い力によって引きもどされた。

慌てて振り向くと私と同じくらいの男の子がいる。右手には杖を持っていて変わった和服みたいなのを着ている。ちょっと不思議だけど、ふわふわの茶色の髪の毛に、優しい顔。とてもいい人そうに見える。

「お前、棒も持たずに歩いてバカだろ。危うくヤチマナコに入るところだったぞ。死にたいならもう止めないけどな」



さっき思ったとていい人そうに見えるというのは無しにしよう。全然いい人そうじゃない。

「いきなりひっぱつといてなんなのよ、こんなところで死ぬわけないじゃない。あと、ナマコがどうかしたの?」

「ヤチマナコだ! ナマコと一緒にするな。ほら、さっきお前が入りそうになったとこだよ」

ヤチボウズの仲間だろうか。でも、さっき私がいた草むらに変わったところなんてないはずだけど。

すると男の子はさっき私がいたところを持っていた杖で刺す。すると杖がずるずると地面に吸い込まれていく。

「ぱつと見は草が浮かんでいてわからないけどな、ここの下は底なし沼なんだ。馬とか牛でも逃げられないほど深くてな、お前なんてどんくさそうだし絶対助からないぞ」

これは私がバカと言われても仕方ない。そんな恐ろしいものがあるなんて知らなかった。タンチョウの時といひ今度からはもつと考えて行動しなごい。「おい、いつまでそこにいるんだ。ここはお前みたいなやつがいていいていってろじゃないんだ。そら、枝でも拾ってさっさと帰りな」

「それが、その、ここに来るまでタンチョウたちについて来たから帰り道がわからなくて……」

「タンチョウたち? ああ、あのいたずら好きなやつらか。それにしたってなあ、帰り道を覚えていないなんてお前、やっぱりバカだろ」

「なによさっきからバカバカって! ひ、否定は出来ないけど。あと、私はお前じゃありません。レナっていうちゃんとした名前があるんだから」

ついむきになって言い返したところで、どこからか、ぐうーとお腹の音が聞こえてきた。

男の子を見ると真っ赤になって震えている。どうやら腹の音の主は私じゃなかったらしい。仕返しに馬鹿にしてやろうとしたが、なんだか男の子は少し顔色が悪い。

ふと、私がちょうどいい物を持っていることに気が付く。ビニール袋をあさり、もう冷め切ったとつもろこしを二つに割り半分をずいっと、男の子の目の前に差し出す。



男の子は戸惑いながらも受け取り一口食べるとすごい勢いで食べ始めた。私も遅れて食べたが冷めても甘くて美味しかった。

「とうきびってこんなに甘くて美味しいんだな。ここ最近探し物のせいで食べる暇がなかったんだ。まあ、その、助かった。」

「いいよそれくらい。さっき助けてくれたお礼ってことでおあいこね。そんなことより何を探してるの?」

「うーん…… ここまで来たら言ってもいいか。俺の名前はフク。信じられないかもしれないけど知恵の神になるために知恵の結晶を探しているんだ」

まさか本当にいたなんて。普通の人では無さそうとは思っていたけどまさか神さまになる人だったとは。

「ねえ、もしフクが知恵の神さまになったら私の家までの帰り道とかわかる?」

「別に神さまになったからっていきなり頭がよくなるわけじゃないぞ。神さまと認められるだけだ。帰り道はあのタンチョウたちを探せば問題ないだろう。仕方ないから手伝ってやるよ」

「じゃあ、私も知恵の結晶探し手伝うね」

結晶と言うぐらいだから宝石みたいに光っているなら見つけやすいな、と考えていたところで思い出した。

私がヤチマナコと知らずに近づいた草むらに光る物があったことを。フクに伝えると、慌てて杖で草むらをかき分け始めた。すると、見つけたらしく杖で引き寄せる。

「ん? これは知恵の結晶じゃないな。鏡だ」

泥を落とすと裏面が木彫りになっていてなかなか渋い。一応女子なんだからという訳のわからない理由で私が持つことになった。

それからは私も棒を持って探し始めたが、どれくらいの大きさかもわからず、闇雲やみくせに探しても見つからなそうだった。

ふと、冷たい風が吹く。どうやら近くの森からきたらしい。涼もうかと森を覗いてみる。





なんと、そこにはヤチボウズが沢山あった。間違はなくおばあちゃんが言っていた森に違いない。まだ明るいの森の中だけ薄暗く冷たい風が吹いていて気味が悪い。

これだけこの周りを探してもないなら、この森の中にあってもおかしくないように思う。

振り返ってフクを見る。泥にまみれながらもまだに探し続けていた。あんなに頑張っているのだからどうにかして見つけてあげたい。

私はフクに気づかれないように森の中に入って行く。地面がヤチボウズだらけで歩きにくいけどどんどん進む。

そして、何か大きな塊が見えてきた。近づいてみてぎょっとする。私の身長ぐらいの大きなヤチボウズがあったのだ。

さすがに引き返そうとするが、巨大なヤチボウズの上に光る物が見えてしまった。

もうここまで来たらとるしかない。覚悟を決めてよじ登り、手探りで確認する。

すると、何か冷たいものに触れる。掴むとそれは宝石みたいにきらきらとしている。喜ぶ間もなく、登っていたヤチボウズが揺れだした。

慌てて降りると、そこには大きな目があった。しまったと思った時にはもう遅い。目が合ってしまったのだ。

突如ヤチボウズから手らしきものが生え強い力で引きずり込まれる。

「こら！ またバカなことしていい加減学習しろ！」

温かい手によって引き戻される。フクだ。来てくれて安心したのもつかの間で、今度はフクが狙われ始める。

フクはすばしっこく、ヤチボウズの手を軽く避けていくが、今の疲れているフクでは逃げるので精一杯のようだ。

どうにかして動きを止めたい。明らかにあの大きな目が弱点に見えるが攻撃できる暇がない。

せめて目くらましになる物でもと思ったがそんな都合のいい物が……あった。鏡だ。

光を反射させようとするが、ここは薄暗い森の奥だ。さらに霧のせいで全然光がない。



もう、どうしようもないかと思った時、突然ヤチボウズがこちらに向かって来た。つい反射的に持っていた鏡を前に突き出す。

すると、ヤチボウズは私ではなく鏡を掴む。

「よし、でかした!」

フクに手を引かれ森の出口まで全力疾走する。息を切らしフクと顔を見合わし、振り向く。どうやら、ついて来てないようだ。

「何で私じゃなくて鏡を取っていったんだろうね」

「きっと鏡の中の自分と目があったんだな。気づかないでやってたのか。」  
なるほど、私はそこまで考えていなかったけどとりあえず助かって良かった。

フクが今にでも怒りそうなので誤魔化すように結晶を差し出す。

ゆっくりと受け取り大きくうなずく。どうやらこれが知恵の結晶で合っているらしい。

「いいのか? レナが見つけたのに」

「いいのいいの。フクあんなに探してたんだから。その代わりに、タンチヨウを探す約束忘れてないよね?」

すると後ろから服の端を引っ張られる。いつの間にかタンチヨウがおり、早く帰ろうとでも言いたげだ。

もうタンチヨウに対する怒りは薄まったので黙ってついていく。最後に小さな声で「ありがとう」と聞こえた。振り返るがもう誰もいなかった。

七日目の朝。今日で帰ってしまうので最後の餌やりになってしまう。六日目の冒険は短い夢のようで、最後にもっとフクと話したかったな、と思っていると大きな影が飛んできた。

珍しい、フクロウだ。最初は地味だと思っていたけど何だかフクに似ていて愛着がわく。

私が食べるためのとうもろこしをあげると美味しそうに食べ始めた。

「あら、フクロウがとうきびを食べるところなんて初めてみたわ」

「え、そうなんだ。美味しそうに食べてるけどね。そういえばおばあちゃん最初に見た時、私にぴったりって言ってたよね」



賢治のまちから  
高校生☆童話大賞

「だってレナちゃん受験生でしょう？ フクロウは知恵や学問の神様と呼ばれているし縁起がいい鳥なのよ」

フクロウが普段食べないとうもろこしを美味しそうに食べて、知恵の神。ある一人の男の子が思い浮かぶ。

「フク、何度も助けてくれてありがとう。お見送りまで来てくれて嬉しいよ」  
私は自信をもってフクロウに言い切ると、フクロウは満足そうに森へ飛び立っていった。